

〔解説〕 平定金川戦圖

高田時雄

金川とは四川省西部の山岳地帯、揚子江の支流である大渡河のさらに上流、大金川と小金川という二つの河流が険しい河谷を形作る、その一帯を指している。この二つの河の流域に生活する住民はチベット人の一種で、ギャロン（rGyal-rong）と呼ばれている。中國の領土内において名目的には中國の宗主権を奉じ、朝廷から土司に拜命される形式をとっているとはいえ、土司は基本的に世襲であり、實質的には宛然一箇の獨立小國家の様相を呈していた。そのギャロンは明代以來、十八土司とか十四土司とか稱され、それぞれが獨立した部落連盟をなしていた。これら土司のあいだには、當然文化や宗教の面で共通する點も多いが、やはり箇々に異なった特性もあって、通婚などを通じて連帶する場合もあるが、互いに相争う場合もしばしばであった。清朝になると、これら土司間の抗争が發端となって、何度か中央の介入が行われたが、乾隆時代にはこの地で二度にわたる大規模な叛亂が勃發した。乾隆はこのいとも小さな土地に、大規模な軍隊を投入し、途方もない額の戦費を注ぎ込むことになる。最終的に辛うじて勝利を納めたものの、拂った代價はあまりにも巨大で、乾隆にとっては思い出すさえ苦々しい戦争であった。この金川戦圖が対象としているのは、乾隆三十六年（1771）から同四十一年（1776）、足かけ五年に及ぶ戦役、すなわち第二次金川平定戦である。しかしこの戦争を語るには、さらに時代を遡って第一次金川平定戦及びその歴史的経緯について瞥見しておく必要がある。

大金川と小金川

大金川は漢字で促浸（Chu chen）と書かれる。チベット語ではまさしく“大きな川”の意味である。一方の小金川は償納（bTsan lha）というが、これは當地の女神の名稱で、またそれを借りて川の名にしたものといわれている。歴史を遡ると、小金川のほうが古い傳統を有する。小金川は明の洪武六年（1373）に置かれた董卜韓胡宣慰司を直接の起源とするが、やがて同地の宗教指導者が金川寺演化禪師の稱號を帯びて一帯に勢力を張った。清朝に入っても、康熙五年（1666）、小

金川の首領嘉勒塔爾巴（嘉勒巴）は金川寺演化禪師の印信を給され、その支配権を安堵された。一方、大金川はといえば、後に小金川から分離独立したものである。康熙末年、ジュンガルのツェワン・アラプタンがチベットに進攻したとき、岳鍾琪（1686-1754）がその討伐を命じられたが、その軍に従った莎羅奔¹が、軍功によって雍正元年（1723）大金川安撫使に任ぜられたことにはじまる。莎羅奔は小金川の嘉勒塔爾巴の庶孫にあたる人物で、いわば小金川の分家筋である。乾隆八年（1743）莎羅奔が死に、弟の莎羅奔細が土司の位を襲うと、本家である小金川の支配をもくろみ、娘の阿扣を小金川の土司澤旺（Tshe-dbang）に嫁がせた。澤旺は氣の弱い人物で、何かにつけ妻君阿扣の風下に立たざるを得ず、擧げ句のはて阿扣は澤旺の弟で土舎²の良爾吉（rDo-rje か?）と私通した。その良爾吉は莎羅奔細と結託し、小金川土司の地位を狙っていた。

野心満々の莎羅奔細は、近隣の土司に對して盛んに攻撃をしかける。乾隆十二年（1747）の正月、兵を起こして革布什咱（dGe bshes grva）土司の正地寨を攻略すると、二月には明正土司に屬する魯密、章谷などに侵攻した。このあたりは打箭爐（Dar rtse mdo、今日の四川省甘孜藏族自治州康定縣）までわずか四日の距離しかない。打箭爐はここを起點に、里塘、巴塘、察木多（昌都）を経てチベット本土に到る交通の要衝であって、軍事に於ける重要性から見ても、清朝としては見棄てておくわけにはいかない。同じ川藏大道に位置する瞻對（今日の四川省甘孜州新龍縣）の叛亂がその前年によく鎮壓されたばかりであった³。このような大金川と小金川の矛盾が導火線となって、第一次金川平定戰の火蓋が切って落とされる。

第一次金川平定戰

さて乾隆十二年である。大金川の不穩な動きを見て、四川巡撫の紀山は泰寧協⁴の副將張興を彈壓に向かわせる一方で、近隣の各協にも嚴戒態勢を命じた。しかし大金川の番兵は一擧に河を越えて打箭爐に迫るとともに、雜谷や丹壩一帯にも兵

¹莎羅奔は文獻により表記が異なり、色羅奔と書かれることもある。人名ではなく、藏語 slob-dpon の音譯で、一種の稱號である。莊吉發は軍機處の檔案を引き、その原義は「土司之子出家者之通稱」で、引いては「諸頭目之長」に轉用されたものだとする。同氏『清高宗十全武功研究』（臺北：故宮博物院、1982年）、116頁。以下、小文では莎羅奔を用いる。

²土舎は土司の屬官であるが、もと土司の家族から出たもので、土司の親族に繼承者がいない場合は、土司となる資格を有する。その意味では同じく屬官の大頭人よりも高い地位にある。

³この地では康熙末年以來、番民による劫略事件がしばしば發生し、雍正八年の出兵をはじめとして、何度も討伐が行われたが、徹底した戰略を缺いたために、騷擾は何度も繰り返された。思い餘った朝廷は乾隆十年七月ついに本格的な用兵に乗り出し、翌十一年ようやく鎮壓を見た。その経緯は、彭陟焱『乾隆朝大小金川之役研究』（北京：民族出版社、2010年）第二章第二節「清初嘉絨藏區及其周邊局勢」、第三節「瞻對之戰及其影響」に詳しい。

⁴協は清朝の常備軍編制單位で、標の下に位置し、副將が置かれた。

を進め、他の土司たちに投降を要求した。事態はここに至って險悪化の様相を見せ始めた。

そもそも即位のはじめ、乾隆はギャロン藏族に對して穩健な政策を採用していた。中國の傳統的な「恩威并施」の政策のうち、どちらかと言えば恩德によって手懐けるといふほうに傾いていたといえる⁵。しかし兩金川の地政學的な重要性が、やがて乾隆に重大な決斷を迫ることになる。この地を掌握できなければ、チベットへの補給路は斷たれ、ひいては虎視眈々とチベットを覗うジュンガルの跋扈をも許すことになる。清朝にとってそれは如何にしても避けねばならない。

乾隆は三月に至って、雲貴總督の張廣泗(?-1748)を川陝總督に補任し、鎮壓に當たらせた。張は貴州で苗族の鎮定に當たってすこぶる功績を挙げたため、その方式をここにも援用しようというのである。張廣泗は、大小金川の兵員二萬餘は必ずしも恃むに足らずとし、乾隆の同意を得て貴州から調用した兵二千を加えて鎮壓に當たり、幾つかの失地を奪回するなど、當初はそれなりの成果を挙げた。小金川の澤汪はすかさず投降し、清軍に附いて大金川の攻撃に参加した。清軍は各方面から兵を投入して大金川の據點に迫るが、大金川は石礮に立て籠もり容易に屈服しないばかりか、しばしば清軍に手痛い打撃を與え、むなしく時間のみが経過した。あまつさえ乾隆十三年の正月、大金川の兵が各處で攻勢に打って出ると、清軍は相繼いで敗北を喫し、ほとんど總崩れの状態となった。清軍の志氣は振るわず、將士の不満は増大の一途をたどる。張廣泗一人が功を焦って孤立していた。この頃まで數月のあいだ、成都一帶では乾隆がすでに死んだという噂がまことしやかに飛び交ったという⁶。

その有り様に業を煮やした乾隆は、十三年四月、諭旨を降して、急遽大學士の訥親(?-1747)を經略⁷として軍營に派遣して作戰の指揮監督に任じるとともに、康熙末年のチベット出兵において大功を挙げ、ギャロン藏族の間にも信服するもの多い岳鍾琪を、提督という肩書きで起用した。この時、岳鍾琪は63歳、すでに退役していたが、それを特に喚び出したのである。しかるに岳鍾琪と張廣泗とはもともと關係が悪く⁸、ことごとに圓滑を缺き、作戰に影響した。また彼らを監督す

⁵Yingcong Dai, *The Sichuan Frontier and Tibet. Imperial Strategy in the Early Qing*, 2009, Seattle: The University of Washington Press, p.117ff.

⁶パリ外國布教會に屬する中國人司祭李安德(Andreas Ly)の日記、1748年2月2日(乾隆十三年一月四日)の條に據る。*Journal d'André Ly, prêtre chinois, missionnaire et notaire apostolique 1746-1763*. 2e édition. Hong Kong: Imprimerie de Nazareth, 1924, 39p. ; Andreas Ly on the First Jinchuan War in Western Sichuan (1747-1749), Translated by Robert Entenmann, *Sino-Western Cultural Relations Journal* (中西文化交流史雜誌) XIX (1997), p.8.

⁷清朝の制度で、特別重要な軍務を帶びて一軍の權柄を掌握する。その地位は總督よりも高い。

⁸雍正年間、ジュンガルのガルダンツェリン征討の際、岳鍾琪は張廣泗の彈劾によって下獄し、ようやく乾隆二年に赦されたという経緯があった。

べき訥親は名門貴族の出身で、乾隆十一年には主席の軍機大臣に就いていた。鋭敏にして剛毅沈着、乾隆の寵臣である。勛戚の故をもって若くして顯貴の地位に昇り、氣位だけはすこぶる高いものがあったが、如何せん軍事作戦を指揮した経験はまったくなかった。六月、訥親が小金川の美諾に置かれた本營に到着するのを待って、新たな作戦が開始された。しかし訥親が勢い込んで立案した攻撃作戦が、惨めな惨敗に終わると、まったく自信を喪失し、自らは陣地の帳房に籠もったままという有り様であった。擧げ句の果ては敵と同じ石礮を築いて、消極的な持久戦に持ち込むことを提案し、乾隆を啞然とさせた。張廣泗はじめ重臣たちも、腹の中はともかく、表だって訥親の策略に反対するものはない。かといって勿論兩手を擧げて賛成するでもない、無責任極まる無氣力な雰圍氣が支配して、荏苒時間のみが経過していった。

訥親からもたらされる奏疏はまったく展望のない空論に満たされ、張廣泗のそれともしばしば矛盾する。乾隆の焦りと怒りが頂點に達しようとする頃、乾隆十三年八月、岳鍾琪から張廣泗を弾劾する奏折がもたらされた。張廣泗は兵員の配置に穩當を缺き、岳鍾琪にすら兵を分け與えないことはともかく、小金川の土舍良爾吉を重用しているのはもってのほかである。良爾吉は土司澤旺の妻阿扣と通じ、敵方の頭目莎羅奔細と結託して小金川土司の印信を奪取せんとしているというのである。乾隆はすぐさま訥親に調査を命じたが、追いかけるように伝えられたのは、訥親と張廣泗が敗戦したという報告である。失望のあまり、乾隆は最後の決斷を下す。訥親と張廣泗を京師に召還し、その責任を問おうというのである。乾隆十三年九月二十九日、張廣泗は「兵を玩んで寇を養い、軍機を誤らせた」⁹罪により、革職の上、刑部に委ねて審理すべく、北京に護送された。十二月七日に至り、乾隆は瀛台（北京の南海中にある皇室の禁園）において自ら張廣泗を鞫問、その五日後斬首に處した。一方、訥親はといえば、經略の任を帯びながら、自ら前線に赴かず、何等の勝算なくして軍を疲弊させ、糧食を浪費した罪により革職、軍營に出頭することを命じられ、結果、士卒の面前で先祖たる遏必隆の刀を用いて斬首されることとなり¹⁰、それは乾隆十四年正月に執行された。

乾隆十三年九月、訥親の更迭を決斷した乾隆が、後繼に選んだのは傅恆（1720頃-1770）、富察氏、鑲黃旗人である。この年三月に亡くなった孝賢皇后の弟、すなわち乾隆にとっては義理の弟である。乾隆は十月六日、傅恆を協辦大學士から大學士に昇任させ、八日には保和殿大學士兼戸部尚書に命じた。當時まだ二十代の若輩に過ぎないこの人物を送り出すについて、乾隆は實に念入りに準備を施した。二度と訥親の轍を踐ませるわけにはいかないのである。兵力は各地の兵三萬五千

⁹「高宗純皇帝實錄」卷三二五、中華書局影印本『清實錄』第13冊、375頁。

¹⁰「高宗純皇帝實錄」卷三二五、中華書局影印本『清實錄』、第13冊、375-6、519頁。

を増員し、將兵の数は總計六萬に及んだ。火力の増強にも意を用い、現地での鑄造以外に、都から威力のある大砲を運ばせた。また軍資金として四百萬の銀兩が用意された。この盤石の構えのもとに、傅恆は一日二百里を行き、十一月二十四日には四川境に入った。十二月二十日、卡撒（mKhar sa）の陣營に着くや傅恆は小金川の土舍良爾吉に出頭を命じ、翌日その罪を數え上げて處刑し、その首を軍門に梟した。

乾隆の心算としては、軍費の問題もあり、事の決着如何にかかわらず、適當年での幕引きもやむなしと考えていた。そこへ莎羅奔細らに投降の意ありという情報をもたらされたため、乾隆は躊躇なく撤兵へ向けた作戦變更に舵を切った。乾隆は初陣の客氣にはやる傅恆をなだめすかして、撤兵を説いた。もう十分な手柄は立てた、今こそ大局的見地に立って、事態を収束するのが國家の大計であるというのである。

大金川にしたところで、すでに二年近い防戦に疲れはて、彈藥も糧食も盡きかけていた。何度も傅恆に投降を訴えるが、傅恆は終始一貫、莎羅奔細とその姪郎卡みずからの出頭を主張する。出て來れば、命だけは保證すると。とはいえ、彼等としてもそれをすぐ眞に受けることは出来ない相談である。そこで岳鍾琪に對して降伏を願い出た。傅え聞いた乾隆は、更に言葉を盡くして傅恆にうったえる。そなたは朝廷第一の大臣、このような邊境のちっぽけな相手に長くかかずらわってはならぬ、速やかに都へ歸ってほしい、と熱心に促した。傅恆もついに妥協し、岳鍾琪と打ち合わせて、受降の次第を決定した。乾隆十四年二月五日、莎羅奔細と郎卡はみずから卡撒の軍營に至って、傅恆に投降した。莎羅奔細らは聖恩によって一死を免れ、傅恆は翌日北京目指して去った。

今回の叛亂の元兇である莎羅奔細を誅戮し得なかったのは、この戦争が勝利とはほど遠いものであったことを物語っている。この苟且の措置が二十數年後に更なる戦争を惹起することになるのは當然であった。とはいえ、金川の征服が確かに大きな困難を伴うものであったことも事實である。夏の最中にもなお雪の降るという劣悪な氣候に加え、至るところ斷崖絶壁、急流がほとぼしるという險阻な地勢は、清軍の前進と糧食の輸送に想像を絶する困難をもたらした。しかし最も大きな障害は、この地域獨特の建築物、石碉であった。金川の兵は僅かの數でこの石碉に立て籠もり、壓倒的な清軍の攻撃に悠然として耐えたのである。

石碉

嫌というほど清軍を悩ませた石碉とは一體どういうものであろうか。ここでその實態を見ておかねばなるまい。

石碉は岷江上流に起源をもち、古代蜀の先民蠶叢氏がすでにこのような石造家屋に居住していたとされる。揚雄『蜀王本紀』の「蠶叢ははじめ岷山の石室中に住んでいた」（蠶叢始居岷山石室中）や『後漢書・南蠻西南夷列傳』の「人々は山に寄り添うように居住し、石を積み重ねて家屋としている。高いものは十餘丈にもなり、これを邛籠と呼んでいる」（衆皆依山居止、累石爲室。高者至十餘丈爲邛籠）といった文獻の記載に加え、考古學における岷江上流域の石棺葬文化の発見などから、その古い歴史が主張されるのである¹¹。

また『隋書・西域傳』「附國」の條には、「嘉良夷」の俗として「好んで復讐を事とするため、石を積み重ねて住居とし、その攻撃を避けようとしている。その高さは十餘丈に及ぶものがあり、低いものでも五六丈、各層が一丈あまり、それを木で區切っている。基礎の部分は方三四歩、上は方二三歩、そのかたちは佛塔に似る。下層に小さな戸口を開け、内から上に登る。夜は必ず戸を閉ざして、盜賊を防ぐ」（俗好復讐、故壘石爲碉而居、以避其患。其碉高至十餘丈、下至五六丈、每級丈餘、以木隔之、基方三四歩。碉上方二三歩、狀似浮圖、於下級開小門、從內上通、夜必關閉、以防賊盜。）と書いてある。この「嘉良夷」とは疑いなく現在のギャロン藏族のことであり、清代の金川役に際して、清軍の前に大きく立ちはだかった石碉が、少なくともこの時代にはすでに広く用いられていたことを知り得る。



圖 1: 石碉

石碉が容易ならぬ要塞であることを身に染みて知った乾隆は、その攻略のために金川の石碉と同じものを北京郊外の香山に作らせ、雲梯を用いた模擬演習を行わせた¹²。その遺物が現在もなお残されている¹³。

今日、古代の石碉が最も集中しているのは甘孜藏族自治州の東部に位置する丹

¹¹徐學書「川西北的石碉文化」『中華文化論壇』2004年第1期、31-36頁。ただし揚雄『蜀王本紀』とあるのは、実際には『古文苑』卷四所收「蜀都賦」の〔宋〕章樵注に引く『先蜀記』とするのが正しい。また『後漢書』の「邛籠」には章懷太子李賢が注を付けて「案ずるに今彼土の夷人は呼びて雕と爲すなり」と言い、更に王鳴盛は「案ずるに今四川徼外の大金川小金川諸土司に碉房あり。碉字は字書に見えざるも、殆んど李賢の謂うところの雕なるべし」という（王先謙『後漢書集解』所引）。

¹²乾隆は八旗の兵卒中から優秀なものを選抜して、石碉攻略のための、いわば特殊部隊を編成し、それを健銳營と稱した。健銳營については、柳茂坤「清朝健銳營概述」『歷史檔案』1994年第4期、106-113頁；彭陟焱「論清朝的健銳營與金川土屯兵」『中央民族大學學報』（哲學社會科學版）2011年第3期、41-45頁を参照。

¹³その場所は今日の北京植物園の構内であるが、『紅樓夢』の作者曹雪芹の故居がここにあったとされ、近年頃に注目を浴びている。

巴縣で¹⁴、同縣内には 562 の古石碉が残されているというが、清代にはさらに多くが金川一帯に存在していた筈である。

かつては土司の官寨の周圍に石碉が建て繞らされているのは當然として、民居にも各戸に附属施設として石碉が備えられていた。普段は住居の一部として使用されるが、戦時には砦になるのである。石碉と石碉の間は地下道で通じていた。上掲の『隋書・西域傳』の記事にも見えるように、高さはさまざまだが、単に石を積み上げるだけなので、数日もあれば出来上がってしまう。さらに防禦能力を向上させるために、外側に壕を掘ったり、障壁を築いたりすることもあった。また地中に深く穴を掘って甕を埋め、寝静まった頃そこに耳を当てると遠方の人馬の動きが手に取るように分かるという装置も用意されていた。守るに易く、攻めるに難いこの石碉の存在が、いかに清軍を苦しめ、多大の犠牲を強いたかは想像に餘りある。

第二次平定戦へのプレリュード

第一次金川平定戦の結果、とりあえず大金川の野望が挫かれると、ひととき勢力を拡大し始めたのは雑谷 (bKra shis gling) 土司で、ギャロン藏族地域の北部と東部をその支配下に収めた。もともと雍正乾隆時期には、ギャロン藏族の中では雑谷と大金川が二大勢力として他の土司と聯合して相対峙するという構圖になっていた。雑谷は梭磨 (So mang)、卓克基 (Cog tse)、黨壩 (Dam pa)、沃日 (Bdang zhing)、革布什咱と繋がり、大金川は小金川、綽斯甲 (Khro skyabs)、巴底 (Brag sting) と連絡があった。乾隆四年、署四川巡撫布政使方顯の奏上にも「雑谷はもと金川の武強を憚り、金川のほうは雑谷の衆多を畏れていた」¹⁵とあるが、いまその力関係が大金川の挫折によって大きく変化することとなったのである。雑谷土司の蒼旺は、平定戦に功績があったことで朝廷から宣慰司を授けられ、意氣軒高、傍若無人の振る舞いが目立つようになる。近隣の土司から迎えた妻を三度も離縁して、これら土司から反感を買い、やがて孤立を深めていく。乾隆十七年四月、蒼旺は隣接する梭磨 (So mang) と卓克基 (Cog tse) 土司に攻撃を仕掛け、あまつさえ清朝地方官の調停をも無視したため、四川総督の策楞と提督の岳鍾琪は四千の兵を出して鎮壓に乗り出し、九月下旬には蒼旺を捕らえ處刑した。この一連の平定作戦は清朝側にとってはまことにスムーズに運んだのであったが、戦後におけ

¹⁴ 「丹巴古碉群」は 2006 年に全國重點文物保護單位に認定され、また現在世界文化遺産に申請中であるという。石碉が近年、特異な建築として國際的な注目を浴びているのは事実で、外國の研究者によるかなり詳しい研究も現れている。Frederique Darragon, *The Star-shaped Towers of the Tribal Corridor of Southwest China*, *Journal of Cambridge Studies*, Vol.4, No.2, June 2009, pp.67-83.

¹⁵ 「高宗實錄」卷一〇五、中華書局影印本『清實錄』第 10 冊、580 頁。

る波及効果の點では更に大きなものがあった。清朝はこの雜谷事件の解決をきっかけとして、この地域の改土歸流¹⁶を強力に推し進めることになる。この思いがけない大勝利は、ギャロン藏族地域の統治に新たなモデルを提供するものとして、乾隆に大いなる自信を與えたものであった。大金川の處遇も考え直す餘地があるかも知れぬと。

一方、大金川にとっても、雜谷土司が消滅したことは、勢力擴張のチャンスがふたたび廻ってきたことを意味した。もっとも警戒すべき隣人は、自ら勞せずして消え失せてくれたのである。先の戦争では相當な痛手を被ったとはいえ、主力は温存されており、まだまだ捲土重來を期すことが出来る。

乾隆二十三年（1758）二月、大金川土司の郎卡（Glang dkar）は娘の阿什諾を革布什咱土司の色楞多敦布に嫁がせ、その娘を使って革布什咱をコントロールしようとしていた。彼らの常套手段である。また一方で、革布什咱内部でも丹東の民衆たちが大金川と氣脈を通じて革布什咱に攻め込んだため、小金川土司の澤旺の子僧格桑（Seng ge bzang）が兵を率いて革布什咱の救援に駆けつけるという事件が起こった。ところが兵力に勝る大金川に追い散らされたのはおろか、色楞多敦布も僧格桑も攻圍を受け、小金川の土地である孫克宗も大金川に占據されてしまった。色楞多敦布は命からがら遁れ、革布什咱全土は大金川の占領するところとなった。

四川総督の開泰は大金川に撤兵を促すとともに、沃日、梭磨などの土司に對し孫克宗に派兵して小金川を助けるように命じた。さらに綽斯甲土司には大金川が本據を留守にしているあいだに、大金川を攻撃せよとも命じた。乾隆の考えは、大金川が強大になることはもとより望むところでないが、嘗ての苦い経験もあり、自ら兵を出すには躊躇される。「番を以て番を治する」ことが出来ればそれに越したことはない。弱小土司が連合して強力な大金川を押さえなければ好いのである。その意味で乾隆は開泰の政策を善しとした。しかし大勢は必ずしも好轉せず、また開泰はこの「以番治番」政策を斷固として遂行しきることが出来なかった。

乾隆二十五年（1760）、大金川土司莎羅奔細が死ぬと、^{おい}姪の郎卡は土司職の繼承を願い出てきた。二十七年（1762）、開泰はこの機會を利用して郎卡を押さえ込もうと圖る。由來、土司の繼承には朝廷の認可のほかにも、土舍や頭人、更には近隣土司の承諾書が必要であった。しかし今回は特に恩典を以て、承諾書は不要とするが、土司繼承の後は必ずや近隣との間に揉め事を起こしてはならぬと、強く言い聞かせたのである。さらに大金川土司の官印は四川の司庫に保管しておき、當分のあいだ郎卡には與えないことにした。これは乾隆の同意を得た上での措置であった。

¹⁶世襲の土司を廢止し、流官すなわち中央政府任命の地方官による統治に改めること。

ところが土司の職に就くや否や、郎卡はさっそく出兵して黨壩土司を攻略したのである。各土司がこれに對抗して兵を出したのは言うまでもなく、乾隆は各土司が一致團結して大金川に立ち向かうよう、開泰に指示を與えたことも當然であった。しかるに開泰は大金川とも關係を持とうとしたために、他の土司たちの疑念を引きおこすこととなってしまう。翌乾隆二十八年（1763）、綽斯甲など九土司が連合して大金川を攻めた時にも、郎卡の派遣してきた使者をしばしば謁見し、慰撫を加えたというのであれば、その姿勢を問われても致し方あるまい。乾隆は開泰を罷免し、阿爾泰を四川總督の後任に据え、朝廷は九土司の側に立っていることを鮮明にするよう訓示した。二十九年六月、乾隆は阿爾泰を一時都に召還し、その間、工部尚書の阿桂を四川總督を署理させた。この時すでに乾隆は再度兵を用いる覺悟であったが、ちょうど緬甸との關係が紛糾してきたので沙汰止みになった。

乾隆三十年（1765）十二月、大金川は黨壩土司の額礪を擊破し、巴旺土司の卡卡角を占領してしまったので、他の土司たちはパニックに陥ってしまった。乾隆は土司たちに訓令を發して「九土司は土地も廣く人口もずっと多いのに、大金川という一土司に對して太刀打ちできぬというのは誠にだらしがない。勇氣を奮い起こし、團結して對處せよ。もともとこの紛争は内地には關係がない、朝廷が出兵するのは筋違いだ」と、本音が「以番治番」であることは口にせず、もっぱら土司たちの自助努力を求める。三十一年（1766）、郎卡が占領地の返還する見返りに、官印の發給及び綽斯甲との婚姻という交換條件を持ち出してきたのに對し、阿爾泰はそれを受け入れようとしたが、乾隆は叱責して斷固許さなかった。また翌三十二年（1767）、郎卡が今度は娘を小金川の僧格桑に嫁がせたのを知り、乾隆はこれがまた紛争の種になることを豫測し、阿爾泰に對して注意を怠るなど命じている。

乾隆三十五年（1770）四月になるとこの地域に新たな展開が見られた。小金川の僧格桑が、父の澤旺が病に倒れたのは、沃日土司が喇嘛僧を使って澤旺と僧格桑の父子に誼いをかけたせいであると稱し、沃日土司の三つの寨を占領してしまったのである。阿爾泰は調停に入ったが不調に終わり、僧格桑が再び沃日の官寨を攻めたので、乾隆の指示のもと小金川土司に直接説諭すべく、提督の董天弼とともに彈壓に向かった。この頃、父親の澤旺はもはや老體で、僧格桑はまだ朝廷の認可は得ていなかったものの、實質的な土司であったため、僧格桑が出て應接した。僧格桑はやむなく撤兵と、もともと占據した土地や捕虜の返還には應じたが、沃日の官寨及びそれより西の土地については返還に應じず、土地の傳統的習慣により始末をつけさせて欲しいと主張、要するに小金川への割讓を求めたのである。阿爾泰は早期解決を焦ったために、判斷をあやまりその請いを容れてしまった。乾隆三十五年八月のことであった。

僧格桑の妻は大金川の郎カの娘であったから、小金川が沃日と事を構えるについて、大金川は当然小金川を應援していた。その後も、小金川は大金川と結託して勢力拡大に努めることになるが、それは取りも直さず、大金川の勢力圏の拡大でもあった。

ところで大金川では乾隆三十五年四月に土司の郎卡在死に、四男の索諾木 (bSod nams) が土司の職を継承した。彼は噶喇依 (また刮耳崖とも、bKar nges) の官寨に住んだが、まだ十九歳と若く、やや軟弱な面があり、實権は勒烏圍 (mDo bu) に居る長男の莎羅奔岡達克 (Gang dag) 等の手にあった。土司の官印と號紙 (任命證書) もまた勒烏圍に置かれてあった。乾隆三十六年 (1771) 四月、革布什咱の土舍郎卡瓦爾佳が大金川の索諾木と結託、革布什咱を夜襲して、土司の色楞多敦布を殺害、革布什咱の官寨を占據した。五月、阿爾泰が革布什咱に至って、大金川に退去を命じたが、索諾木はそれを拒否したばかりか、革布什咱地方の百姓を大金川へ賞賜されたいと願った。小金川も大金川に倣って行動を開始する。僧格桑は再び沃日土司に出兵し、さらに明正土司を攻撃した。先に僧格桑が沃日を侵したとき、明正土司がそれを諫めたため、僧格桑はそのことを恨んでいたのである。

事ここに至って、これまで「以番治番」を掲げて我慢に我慢を重ねてきた乾隆もついに最後の決心を餘儀なくされる。乾隆三十六年七月二十四日、「宜しく先ず小金川を始末し、頭目を捕らえ、重罪に處せ」(宜先辨小金川、擒其兇渠、治以重罪) との上諭を下し、五千の兵を以て鎮壓に向かわせた。第二次金川平定戦争の勃發である。

苦戦、そして敗戦

いよいよ本格的な金川討伐戦争に取りかかるに際して、乾隆は阿爾泰がもともと軍務には経験がなく、しかも高齢であることから、四川総督の職を解任し、雲貴総督の徳福を四川総督に異動させる措置を講じた。しかし徳福はビルマの戦争を理由になかなか四川に着任しないのを知ると、乾隆はこれも即座に解任し、ふたたび阿爾泰に暫時総督を署理させるなど、指揮系統の整備に圓滑を缺いた。しかしやがて副將軍温福を大學士に任じ、阿桂を帶同して雲南から川西の軍營に向かわせ、阿爾泰に代わって軍を統率させた。また軍機處行走戸部侍郎の桂林を四川総督に任じ、金川に急行し軍務に當たさせた。こうしてようやく陣容が整い、清軍の攻勢が開始された。温福は汶川を出て西路から進攻し、桂林は南路軍を率いて小金川の制壓に取りかかる。小金川は第一次平定戦で清軍が大砲を用いて石礮を破壊しようとする戦術を知っていたので、石礮内部を木で強化したり、外に石

の障壁を設けたりして、すでに十分な準備を行っていたうえ、清軍が兵を進めるにつれ、行路はいよいよ急峻となり、進攻はしばしば停滞した。

指揮判断の間違いも起こった。三十七年（1772）四月、桂林の部將薛琮の部隊三千名が敵に圍まれ難澁した時、桂林が援軍を出さず、二百名が辛うじて逃れたほか全員壊滅するということがあり、桂林は解任された。そのため西路から阿桂を配置轉換し南路を統率させた。かくして徐々にではあるが、小金川への包圍は縮まり、三十七年十二月十一日、温福が底木達の官寨に逼ると、土司澤旺が寨を出て降伏を請うた。澤旺は捕縛の上、都に護送され、こうして小金川は一應の平定を見たかに思われた。しかし事はそう容易ではない。

乾隆は温福に定邊將軍を授け、阿桂と豊昇額を副將軍とし、いよいよ大金川へ進發する準備に取りかかる。乾隆はそのために軍を三路に分かつことにし、第一路は温福が率い、舒常を參贊大臣として、功噶爾拉から喀爾薩爾に逼り、索諾木の居る據點噶喇依を衝く。阿桂の第二路は、海蘭察が參贊大臣となり、僧格宗、納圍、納扎木を経て、當噶爾拉に至り、噶喇依を目指す。第三路は、豊昇額が率い、漢員の哈國興を參贊大臣とし、章谷、吉地から綽斯甲に進み、舒常と兵を合わせて俄坡に進軍、莎羅奔の住む勒烏圍の官寨を奪取しようというのである。

しかし豫想されたとはいえ、敵の防禦は堅く、また自然条件は劣悪、三路いずれも甚だしい苦戦を強いられた。特に温福の率いる第一路は功噶爾拉で強力な抵抗に遭い、進攻路線の変更を餘儀なくされ、乾隆三十八年（1773）二月十日、木果木に軍營を移した。昔嶺から噶喇依に逼ろうというのである。木果木という地は、東北は小金川の土地に連なり、山を越えると大金川の勒烏溝で、勒烏圍に通じている。大金川のゲリラがしばしば出没しており、萬一後方を遮断されると大變なことになるため、乾隆も心配の餘り全軍に注意を促していたほどである。ところがその憂慮が現実のものとなる。大金川が温福の軍中に送り込んだ密偵の情報により、後方の備えが疎かになったのを見透かし、六月一日の夜、大金川は底木達を攻撃、寨内の小金川降伏兵が呼應して、底木達の寨はあっけなく占據され、駆けつけた董天弼も殺害された。底木達というのは、先に陥落した小金川の官寨である。兵變はまたたくまに各地に波及し、後方との連絡はすべて大、小金川の兵により遮断されてしまった。阿桂は援軍を派遣したが、もはや手遅れであった。六月九日から十日にかけ、木果木の軍營は執拗な攻撃にさらされ、全軍ほぼ壊滅するに至り、温福もまた戦死した。戦いが終わると、一帯は見渡す限り尸體の山であったという。温福の全軍二萬のうち、四千の將士が陣没し、失われた火器、軍糧などの損失は莫大なものであった。まさに空前の敗戦である。

いまや乾隆の希望はただ阿桂一人に託すしかなかった。阿桂（1717-1797）は正

藍旗に屬する旗人で、かつて第一次金川平定にも關與し、その後西域で準回部の平定に参加して功績を擧げた経歴がある。木果木の敗戦挽回のため、乾隆は阿桂に定邊將軍を授け、金川討伐を統率させた。

しかし阿桂にとっても、一旦撤退して軍を立て直すしかない。しかも後方は遮斷されているのである。阿桂は木果木の敗戦の原因の一つが敵の間諜であることを知り、軍中にいる小金川の降伏兵をすべて始末し、また當噶爾拉から章谷にかけての後方一帯にいる小金川の男子のうち強壯なものを殲滅、石礮を破壊し、金川の河流を通じて、大、小金川が連絡できないように兵を遣って僧格宗の山向こうにある皮船を盡く没収した。このような周到な手配を行った上、阿桂は六月二十五日から七月初にかけ、徐々に撤兵を開始し、翁古爾壟など要害の地を駐屯地として、無事全軍の撤退を完了した。こうして清軍は再度金川攻略のための基地を確保することが出来たのである。

戦圖

さて金川戦圖全 16 張は、第二次金川平定戦争のうちでも、ここから先の戦闘場面を圖に描いたものである。當然ではあるが、敗戦や官軍の名譽を汚すような場面は知らぬ振りをして、輝かしい勝利の場面だけを描くのである。長期にわたる金川戦争にはさまざまな重要な局面があった。しかし戦圖に描かれるのはそのごく一部の場面に過ぎない。

ところで底本であるロシア所藏の圖冊の配列は戦争の展開時間軸に沿っておらず、明らかに装幀に際して綴じ誤った部分がある。例えばロシア圖冊で四番目に位置する「金川平定御午門受俘」は、内容からしても戦後の凱旋式典のあとに行われた俘虜引き渡しの儀式を描くものであって、この位置にはそぐわない。さらにこの圖に添えられた乾隆御製の紀年も丙申（乾隆四十一年）であって、甲午（乾隆三十九年）の紀年を有する 1～3 の直後に來るべきものではない。その他、個々の戦圖の配列にも誤りがある。

いまこれらを正しい順序¹⁷に並べ換えたうえで、次表を作成した。御製詩の標題末尾に漢數字で注記したものがロシア所藏圖冊の順序である。さらに個々の戦圖の事件發生年月日を『平定兩金川方略』『阿文成公年譜』などに據って分かる限り補記しておいた。

¹⁷『國朝宮史續編』には正しい順序が掲げられている。北京古籍出版社 1994 年刊本、下册、967 頁以下。

	御製詩題	干支	事件發生年月日
1	將軍阿桂奏報收復小金川全境（一）	癸巳	乾隆 38 年（1773）11 月 6 日
2	將軍阿桂奏報攻克羅博瓦山礮痛殲賊衆相機進剿（六）	甲午	乾隆 39 年（1774）2 月 23 日
3	將軍阿桂奏報大兵攻克喇穆喇山梁及日則丫口（二）	甲午	乾隆 39 年（1774）6 月 22～25 日
4	副將軍明亮奏報攻克宜喜達爾圖山梁已據要隘籌進取賊巢（五）	甲午	乾隆 39 年（1774）7 月 4 日
5	副將軍明亮攻克日旁一帶礮寨詩以誌慰（三）	甲午	乾隆 39 年（1774）10 月 19 日
6	將軍阿桂奏報攻克康薩爾山梁礮寨木城（七）	乙未	乾隆 40 年（1775）1 月 12 日
7	將軍阿桂奏報攻克木思工噶克丫口等礮柵（八）	乙未	乾隆 40 年（1775）4 月 13 日
8	副將軍明亮奏報攻克宜喜甲索等處礮卡（十二）	乙未	乾隆 40 年（1775）4 月 12～13 日
9	副將軍明亮奏報攻克石真噶賊礮（十三）	乙未	乾隆 40 年（1775）7 月 28 日
10	將軍阿桂奏報攻克苗則大海昆色爾山梁並拉枯喇嘛寺等處（十）	乙未	乾隆 40 年（1775）8 月 4 日
11	八月廿四丑時、阿桂馳報攻門勒烏圍紅旗、是晚奏摺至知攻克賊巢詳悉（九）	乙未	乾隆 40 年（1775）8 月 24 日
12	將軍阿桂奏報攻克科布曲索隆古山梁等處礮寨即期迅擣賊巢（十一）	乙未	乾隆 40 年（1775）12 月 7 日～
13	將軍阿桂奏報攻克噶喇依賊巢紅旗報捷（十四）	丙申	乾隆 41 年（1776）2 月 4 日
14	於郊臺迎勞將軍阿桂凱旋將士等（十五）	丙申	乾隆 41 年（1776）4 月 27 日
15	金川平定御午門受俘（四）	丙申	乾隆 41 年（1776）4 月 28 日
16	紫光閣凱宴成功諸將士（十六）	丙申	乾隆 41 年（1776）4 月 28 日

このように順序を正した上で、以下、戦圖に沿って第二次金川平定戦争の展開を見ていくことにしよう。

凱旋への道のり

阿桂は無事に撤兵を終えると、乾隆と打ち合わせて、新たな作戦計画の策定を開始した。今回は昔嶺、當噶爾拉、宜喜といった方面からの進攻は考え直さねばならぬ。やはり軍を二路に分かつこととし、西路は阿桂が率い、色布騰巴爾珠爾を參贊とし、路頂宗、沃日、明郭宗を進む。これが本隊である。南路は明亮を定邊右副將軍とし、富徳を參贊として軍を率いさせた。西、南の兩路軍はそれぞれ

さらに三路に分かって軍を進める。清軍は六萬餘、それに革布什咱、黨壩などの兵が加わり、總數は七萬に近い。十月二十五日の夜、一齊に出發である。

阿桂は三方から小金川に向かって進撃、沃日の官寨を奪回すると、大、小金川の兵は路頂宗に退却した。清軍は十一月一日、二日の兩日で、路頂宗、明郭宗などを突破し、美諾及び底木達の官寨を奪回した。明亮の南路軍も十一月六日に僧格宗を奪回すると、大板昭、彌當、曾頭溝などの住民がわれ先に歸順してきた。こうして小金川の全域がふたたび清軍の平定するところとなったのである。(第1圖)豫想を越える、素早い勝利であった。しかしまだこれから大金川の平定が残っている。

乾隆は阿桂の報告を受け、小金川の善後策を指示するとともに、兵を分かって大金川へ進發せよと命じた。いよいよ大金川の平定に向かうに際し、阿桂は乾隆に更なる兵の増員を請うた。乾隆はその要請に應えて、各地から九千の兵を調達し、急ぎ金川に向かわせた。こうして兵の總數は八萬に近い大軍となった。

軍を三路に分かつことにした。阿桂の主軍は西路の谷噶山梁の道を取り、明亮の軍は南路から馬奈、馬爾邦を通り兵を進める。さらに豊昇額が卓克采から進んで凱立葉を攻めることにし、これを後路とするというものである。乾隆もこの計畫に同意した。

乾隆三十九年(1774)の正月六日、大金川平定戦が火蓋を切り、大軍は續々と進發していった。もちろん大金川の抵抗はきわめて頑強であった。それでも清軍は一步一步前進し、敵の寨を打ち破っていった。阿桂の率いる西路軍は大金川に通じる門戸たる羅博瓦山を攻め、八つの石礮を攻略、敵兵二百餘を屠り、二月二十三日ついに山峰を占領した。(第2圖)

六月二十二日から二十五日にかけて、阿桂は額森特、烏什哈達、福康安、海蘭察らにそれぞれ別路を経由し、戰略上の要地たる喇穆喇穆の山梁及び日則丫口を攻撃させ、石礮三十六座、木城五座、平礮百餘を奪取し、敵兵百餘を殺すという戦果を挙げた。(第3圖)

明亮の率いる南路軍は七月四日、敵の本據地勒烏圍から西北へ五十里、綽斯甲との境をなす宜喜山(Ye shes)の達爾圖峰を攻略、次いで俄坡、格勒古を撃破した。(第4圖) 明亮はまた綽斯甲に通じる要衝、日旁(Ri phang)一帯の寨を突破した。十月十九日の出來事である。(第5圖)

ところで先に小金川が再度陥落した時、實質的な土司であった僧格桑は間道を通り辛うじて大金川に落ち延びていた。しかし大金川では僧格桑を厄介者扱いして冷遇、ほとんど監禁状態に置いていたが、最後にはこれを藥殺してしまった。現下の戦況を不利と見た索諾木は僧格桑の死屍を献上して阿桂に降伏を願い出た。も

とより阿桂は聞く耳を持つ筈もなく、乾隆の指示に遵い僧格桑の首級を省城に留め、索諾木を捕獲するのを待ち、一緒に都に送ることにした。こうして相変わらず激しい戦闘は続けられた。敵は石礮を強化するとともに、深く壕を掘って防禦を固め、石礮の上から石を雨霰と投げつける。木果木で捕獲した火砲も威力を發揮し、清軍の前進はしばしば停滞せざるを得なかった。

乾隆四十年の正月になって、索諾木は再び降伏を願い出て、捕虜となっていた清軍の兵二十六人を送り届けてきたが、乾隆はなおもその投降を許さなかった。正月十二日、阿桂は勒烏圍の東北九十里にある康薩爾山梁の礮寨木城を攻略した。(第6圖) この頃、大金川では勒烏圍の陥落はやがて必至と見て、糧食などを皮船を使って噶喇依に移し始めていた。また捕獲した大金川のスパイに據れば、勒烏圍を自ら焼き拂うという作戦も考えられていたらしい。大金川側の状況はかなり切迫したものとなっていた。

清軍は次々に據点を攻略し、勒烏圍に逼っていく。四月十三日、阿桂は木思工噶克丫口などの礮柵を攻略し(第7圖)、同じ頃、明亮は宜喜山、甲索山などに散在する石礮を攻略(第8圖)、次いで七月二十八日に敵の重要な據点石眞噶の賊礮を陥落させた。(第9圖) 阿桂はまた勒烏圍を目前にした各要塞を攻撃し、敵の激しい抵抗を抑え、八月四日、菑則、大海の石礮を攻略、昆色爾山梁の喇嘛寺、拉枯喇嘛寺を奪取した。(第10圖)

勒烏圍はもうほとんど裸同然となった。これまで官軍はもう一月ばかりも包圍を続け、晝夜にわたって攻撃を仕掛けてきたが、乾隆四十年(1775)八月十五日夜の攻撃によって、勒烏圍の官寨はついに陥落した。時に十六日子の刻であったという。連日の雨がまだ降りやまずにいた。二十四日、乾隆は木蘭の行宮でその捷報を受け取った。(第11圖)

阿桂と明亮の軍は、十七日の夜、間髪を容れずもう一つの據点である噶喇依に進軍する。阿桂の軍は三萬二千、明亮の軍は二萬五千、これだけの軍勢であれば瞬時の攻略もあろうかと思われるが、しかし勒烏圍から噶喇依に至る道筋には、千を以て数える大小の礮寨が立ちはだかり、それらを殲滅するには一定の時間を要した。清軍の將兵は消耗が甚だしく、戦死者の數も少なくない。決して破竹の勢いとはいかないのである。阿桂は十二月七日夜から、要害である科布曲、索隆古の山梁の礮寨を攻撃、ここを陥落させ、噶喇依への道を切り開いた。(第12圖)

十二月十八日の夜に至り、兩路の軍はようやく噶喇依の官寨に至り、これを包圍した。索諾木の逃亡を防ぐため、水陸の通路はすべて封鎖された。まず索諾木の母阿倉や姉妹たちが降伏を願い出て、二十日には彼等が投降してきた。そこには僧格桑の妻得什爾章も含まれていた。得什爾章の實家は大金川であることは上

にも觸れた。阿桂は母の阿倉に勧め、使者を官寨に送り、子供たちに投降を促した。すると二十八日、長男の莎羅奔岡達克が先ず降り、翌乾隆四十一年（1776）正月十三日になって、彭楚克（Phung mtshog）と大頭人らが降伏してきた。しかし索諾木は病と稱して出てこない。清軍は、そこで晝となく夜となく官寨に砲弾を浴びせかけ、官寨はもはや形を留めぬほどに破壊された。二月四日朝、ついに索諾木が莎羅奔甲爾瓦（sLob dpon rgyal ba）、沃雜爾斯丹巴（'Od zer bstan pa）の兄弟とともに降伏し、官印を捧呈した。また大頭人の丹巴沃雜爾（gDan pa 'od zer）、阿木魯綽窩斯甲（A 'brug khro skyab）、尼瑪噶喇克巴（Nyi ma grags pa）をはじめ、官寨に立籠もっていた老幼男女二千餘も投降し、かくして大金川の全域が平定された。同日、阿桂が軍營から急ぎ發した紅旗の使者は、十二日桃花寺の行在にいる乾隆のもとに到着、戦勝が報告された。（第13圖）思えば、乾隆三十六年七月、小金川征討の軍が發せられてから、この日に至るまで、四年と四ヶ月の月日を要し、投入された將兵の數は延べ十二萬五千五百人に及んだ。

降伏した索諾木たち兄弟は二月六日に同地を出發して北京に護送された。僧格桑の首も一緒に運ばれたのは言うまでもない。阿桂は二月二十四日に發程して凱旋の途に就いた。北京に着くと、四月二十七日、郊臺に於いて阿桂ら凱旋將士を勞う盛大な式典が舉行された。（第14圖）

その翌日は午門に於いて受俘の式典である。乾隆は樓上の玉座に座し、その眼下には左右に整列した將士の間、地に伏した索諾木たちの姿が描かれている。彼ら首魁たち十二名は凌遲の刑に處せられ、その他、索諾木の母や成年に達した者は死罪、未成年者は永久禁錮、その他の婦女は伊犁に送り、厄魯特、^{エルート}索倫^{ソロン}の功臣の家に奴隸として與えた。（第15圖）

同日、紫光閣において宴が設けられた。（第16圖）また先の準部回部平定の例に倣って、最も功績のあった功臣五十名の圖像を描いて、これには乾隆の御贊を附し、また次に功績のあった五十名は同じく圖像に、こちらは大學士于敏中等の手になる贊を附して、ともに紫光閣に掲げることとした。

さらに戦後、乾隆四十三年（1778）、大金川の勒烏圍及び噶喇依、小金川の美諾に、それぞれ平定を記念して御製碑が建てられた。その碑文は國書（滿文）、正書（漢文）、蒙古文、西番（藏文）の四體文字をもって刻まれた。そのうち、美諾のものはすでに失われ、勒烏圍のものは文化大革命の最中に、碑身が三個の石臼に加



圖 2: 噶喇依碑

工されたため残欠が甚だしい¹⁸。完全に残るのは噶喇依の一基のみである。この噶喇依碑は2002年に四川省の省級文物保護單位に指定され、現在では碑亭も作られて、非常によく保存されている¹⁹。

金川戦圖の製作

西域戦圖の銅版畫はフランスに發注した外國製であったが、乾隆は今度の金川戦圖を作るに当たって、国内で銅版の作製を試みた。その出来栄えには明らかな違いがあるが、これ以降戦圖の製作はすべて内務府造辦處に命じて作る習わしとなった。

乾隆は戦争終結後、まだ阿桂ら將士が都に歸らないうちから、戦圖の製作に着手した。乾隆四十一年（1776）三月十八日の造辦處檔案に、如意館の艾啓蒙（Ignace Sicherbart、1708-1780）と姚文瀚に對して下繪の起稿を命じている²⁰。その後、六月にも徐揚に對し金川戦圖の作製を命じているが²¹、これが正しい意味での下繪かも知れない。というのは乾隆四十二年（1777）三月には、艾啓蒙に對して、徐揚の畫いた平定金川得勝圖十六張に照らして起稿せよと命じているからである²²。艾啓蒙の仕事には、また賀清泰が参加した²³。その後、順次製作は進行し、六月十日には賀清泰の畫いた攻克美諾得勝圖（即ち收復小金川全境）を以前のやり方で壓印するに当たり、新しい戦圖は山樹や人物に皴法（陰翳や立體感を出す手法）が少ないので、これで鑄刻した場合には、回部得勝圖の細緻さに及ばないだろうから、銅版の作製にはもとのようなやり方をせよと乾隆が注文をつけ、銅版が出来上がったら、新舊の二つを持ってきて見せよとも言っている²⁴。いずれにせよ乾隆四十八年（1783）の四月に至って、金川戦圖を三十五部裱装せよとの命令が下されているので²⁵、この時までには全十六圖の印刷が終了していたことが窺われる。

では金川戦圖は全部で何セット作られたのであろうか。乾隆五十四年の檔案によると、回部圖はこれまで二百三十七部を印刷し²⁶、金川圖は二百十部を印刷した

¹⁸黄清華「《御製平定金川勒銘噶喇依之碑》考介」『四川文物』2007年第3期、74-76頁。

¹⁹黄清華「《御製平定金川勒銘勒烏圍之碑》解析」『四川文物』2009年第2期、79-83頁。

²⁰中國第一歷史檔案館、香港中文大學文物館合編『清宮内務府造辦處檔案總匯』（人民出版社、2005年）、第39冊、405-406頁。

²¹同上、788頁。

²²同上、第40冊、265頁。

²³同上、第40冊、288頁。

²⁴同上、第40冊、433頁。

²⁵同上、第46冊、747頁。

²⁶回部圖すなわち西域戦圖のこの数は、果たしてフランス製のオリジナルを含んでいるのか、或いは原銅版を用いて北京で印刷した數量のみであるのか、はなはだ氣になるところである。もし前者だとすれば、北京印刷分は僅か三十七部になってしまうので、恐らくは北京印刷だけを數えあげ

とあるから、この後に刷印されることがなかったとしても、最低限この数は印刷されたものである²⁷。

た数字なのであろう。

²⁷同上、第 51 冊、330 頁。